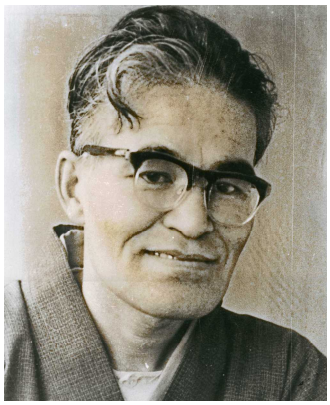
魂の故郷～本当のアイヌ文化を残したい～

知　里　真志保

銀のしずく
降れ降れ
まわりに
（知里真志保之碑）



〔知里　真志保氏〕
（『知里真志保』小坂博宣著から転載）

北海道登別の海に近い崖の上に、一本の石碑が建っていました。大きい白い字が、艶のある黒御影石の地肌によく映えて見えます。「銀のしずく」というのは、アイヌ民族のカムイ＊・ユーカラ「ふくろうの神の自ら歌った謡」の一節で、知里真志保の姉、幸恵の訳によるものです。その碑の台座には、次のように記されています。

「彼は登別川のほとりで育った　アイヌ系のわんぱくな少年であった　長じて天才的言語学者となり　その名は今に世の畏敬の的である　故郷をしのび　海の見える岡に住みたいと云っていたという　有志相はかり　ここハシナウシを選びこの碑を建てた」

知里真志保は、アイヌ民族出身の優れた言語学者です。一九〇九年二月二四日、幌別村（現在の登別市）でアイヌ民族の両親の間に生まれました。この碑は、真志保の十三回忌に、故郷の友人たちが、真志保が好んでよく口にしていたユーカラの一節を刻みこんで建てたものです。「ハシナウシ」とは、アイヌ語の地名で、has-inaw-us-i（枝・幣＊・ある・所）となります。昔、アイヌの人たちは、ここに柳の小枝を削ってつくった幣を立て、海の幸が豊かであるよう神に祈りました。石碑からは、太平洋がどこまでも広がって見えていました。そんな海辺で育った真志保は、アイヌ語の研究に打ち込み、人生の大半を故郷から離れて暮らし、晩年は、北海道大学でアイヌ民族出身として初の教授となりました。しかし、真志保は亡くなるまで海のある故郷の風景が忘れられなかったのです。

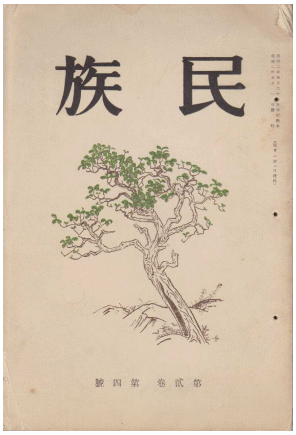
真志保は登別の小学校を卒業後、家庭の経済的な事情から、姉の幸恵がいる旭川の伯母に預けられました。成績が良かった真志保は、北海道庁立旭川中学校を受験しましたが不合格となりました。

そのため真志保は、旭川の北門尋常高等小学校の高等

科に進学し、その後、北海道庁立室蘭中学校に入学しました。

中学生になった真志保は、学校の先生の勧めと母の助けも借りて、アイヌ民族の昔話を和訳した『山の刀禰、浜の刀禰物語』を書きました。その原稿が、金田一京助が編集する雑誌『民族』に採用となり、真志保は人生で初の原稿料を手にしました。金田一は、日本人で初めて、文字をもっていなかったアイヌ民族に関しての研究に取り組み、真志保の姉、幸恵が『アイヌ神謡集』を出版する手助けをした人物です。金田一は、この『山の刀禰、浜の刀禰物語』の紹介文の初めにこう書いています。「これが中学生の手で成された仕事かと驚嘆する程よくできている。訳についてはお母さんの援助もあったことであろうが、音の聞き取りと、写し方との精確さ、これ程よくできる人が、同族のうちに現れたかと思うと、幸恵さんの再来のように思えて、一行一行、涙の目を押さえながら読ませてもらった。」金田一が特に驚いたのは、アイヌ語のローマ字綴りについてでした。それは幸恵が『アイヌ神謡集』をまとめる際に採用したアイヌ語表記法でした。旭川で同居しながら、姉の筆録作業を見ていた真志保には、それほど難しい聞き取りや写し方ではなかったのかもしれません。

真志保は、金田一らの援助を受け上京、旧制第一高等学校（現東京大学教養学部）に入学しました。その頃、一高への入学は東京帝国大学（現東京大学）よりも難しいとされており、当時の新聞は「日本人でも難関の所にアイヌが合格、立志伝中の人」と書き立てました。



〔雑誌「民族」の表紙〕
（『知里真志保』小坂博宣著から転載）

知里家は、アイヌ民族といっても、和風の生活を送っていた父とキリスト教との関わりが深く洋風の生活をしていた母の影響で、日常生活ではたまにアイヌ語の単語が使われるぐらいの生活をしていました。『山の刀禰、浜の刀禰物語』を日本語とローマ字で書いた真志保は、アイヌ語自体、一高時代に母に習ったもので、外国語のような感覚でした。真志保は高校卒業時、英語とドイツ語の成績が優秀で、東京帝国大学に入学する際、一度は英文学を選択しました。しかし、翌年、言語学科に転科し、いよいよ本格的にアイヌ語研究の道を歩むことになりました。

当時のアイヌ民族研究者の多くは、これまで受け継がれてきた*叙事詩が失われるのが惜しいから記録し、研究してきましたが、これはアイヌの人たちから見れば、アイヌ文化を外側から観察しているに過ぎませんでした。真志保は、大学時代、友人にこう語っています。

「俺は、世界中でただ一人、内側からアイヌ語をやるのだ。生活のニュアンスまで分かるアイヌ語を。」

大陸での戦争の収拾のめどがたたず泥沼化し、国民生活にも暗い影を投げかけ始めた頃、真志保に室蘭中学校の恩師、福山惟吉先生から連絡がありました。福山先生は樺太の女学校で校長を務めており、優れた教師を求めていたのです。

真志保が師とした金田一のアイヌ語学は、樺太に住むアイヌの人たちの言語調査によって大きく進展していました。なぜなら、当時すでに北海道では、アイヌ語を母語とする人が少なくなっていましたが、樺太では、依然として古来の風習が残っており、アイヌ語を日常の言語とする者が多かったからです。師を乗り越え、本当に正しいアイヌ語を後世に残したいと考えた真志保は、悩み考え抜いた末、ついに樺太へ渡る決意を固めました。この時、真志保は、周囲に対して「*バチラーも間違っている。金田一先生にも間違いがある。いま俺がやらなければ、それは永遠に正しくされない。」と胸の内を語っています。

一九四〇年四月、樺太の豊原高等女学校に赴任した真志保は一年生の担任となり、主に英語と国語の指導にあたりました。さらに、同年七月、真志保は、アイヌ語の研究に結びつく、樺太庁博物館の技術員も務めました。博物館には、研究の成果の発表や一般の方に知ってもらうためのアイヌ民族に関する数種類の刊行物がありました。

これらの刊行物に関して、真志保が講演で語ったと思われる原稿が残っています。

「いうまでもなく、立論は正確な資料に基づかなければならず、正しい資料の間から泉のごとく自然に湧いて出たものでなければならないと思うのであります。論というものはつくるものではなく、出来るもの――その意味で私は論より証拠を重んずる者であり、研究より前にまず正確な

〔豊原女学校一年の入学記念写真〕
（『知里真志保』小坂博宣著から転載）

調査が行われなければならない。私の専門の分野において、従来発表されてきた業績を見ますに、きわめていいかげんな資料の上に打ち建てられた研究が多い。〈中略〉樺太アイヌ研究において、とくにこの*弊を痛感する。」

一九四三年に北海道帝国大学に戻った後も、真志保はこの精神を貫きアイヌ語の研究を続けました。

一九五五年に朝日文化賞に輝いた『分類アイヌ語辞典』や翌年出版した『アイヌ語入門』は、真志保の代表作です。『アイヌ語入門』のあとがきには、終わりの方で、一行、活字をゴシックに直し、「アイヌ語研究を正しい軌道にのせるために！この本を書いた私の願いは、ただそれに尽きるのである」と、強く思いを込めています。それまでのアイヌ民族に関する文献の誤りや、間違ったまま世の中に広まった説、そして時に妥協しそうになる自分自身との戦いを思い返しての心の叫びと言えます。

学生時代、真志保が東京から帰省する際、友人に渡した手紙の中に、次のような一節を残しました。「では僕は北海道に帰る。あちらでのみ、僕は僕自身のものとして生活することができる。僕の感情で、僕の意志で行動することができるのだ。『魂の故郷』という言葉は、この場合の僕にこそ、はじめてぴったりするのだ。」北海道を愛し、本当のアイヌ文化にこだわった真志保の魂は、アイヌの人たちの魂と重なり、今に受け継がれています。

一九〇九	幌別村（現在の登別市）で生まれる
一九一五	幌別村登別尋常小学校に入学する（六歳）
一九二一	旭川北門尋常小学校高等科に進学する（十二歳）
一九二三	北海道庁立室蘭中学校に入学する（十四歳）
一九三〇	上京し、旧制第一高等学校に入学する（二十一歳）
一九三三	東京帝国大学文学部に入学する（二十四歳）
一九三七	東京帝国大学の大学院に進学する（三十八歳）
一九四〇	樺太庁立豊原高等女学校に赴任する（三十一歳）
一九四三	北海道帝国大学北方文化研究室嘱託となる（三十四歳）
一九五四	文学博士の学位を授与される（四十五歳）
一九五八	北海道大学教授となる（四十九歳）
一九六一	心臓病のため死去する（五十二歳）
一九七三	知里真志保記念碑が建てられる（一九九六年に登別小学校へ移設）

＊カムイ・ユーカラ…アイヌ語で語られる英雄や神々の物語など
＊幣…ぬさ（神に祈りを捧げるための道具）のこと
＊叙事詩…伝説や英雄の行いなどを、物語のように述べた詩
＊バチラー…アイヌ語を研究したキリスト教の宣教師
＊弊…よくないこと。習慣的な悪さ